《資料》

竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介

―― 和歌を主題とする組香（七）――

矢野　環
福田智子

本稿は、「《資料》竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介―和歌を主題とする組香（一）―」（『社会科学』第46巻第3号、二〇一六年一一月）、「同―同（二）―」（『社会科学』第46巻第4号、二〇一七年二月）、「同―同（三）―」（『社会科学』第47巻第1号、二〇一七年五月）、「同―同（四）―」（『社会科学』第47巻第2号、二〇一七年八月）、「同―同（五）―」（『社会科学』第47巻第3号、二〇一七年十一月）、「同―同（六）―」（『社会科学』第47巻第4号、二〇一八年二月）に引き続き、竹幽文庫蔵『香道籬之菊』所載の組香について、とくに和歌を主題とする組香を対象に、翻刻と考察をおこなうものである。本稿では、射の巻から、新時鳥香、蛙香、妻乞香、また御の巻から、重陽香、枝折香、八幡山香の、計六つの組香を取り上げる。資料に関わる基本的な説明は、「《資料》竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介」（『社会科学』第46巻第2号、二〇一六年八月）を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、前掲『社会科学』第46巻第3号に詳述しているので、本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

凡例

一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名ともに通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、「（朱）」と示し、一面の終わりには〝」〟を付して丁数を記す。

一、考察には、（1）竹幽本組香の方法、（2）和歌作品との関わり、というふたつの観点を設ける。

一、（1）の冒頭には、構造式を記す。また、解説を要する香道用語には「*」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」（『社会科学』第46巻第3号）を参照されたい。

一、（2）で引用する和歌作品の本文は、特に断らない限り『新編国歌大観』Ver.2（角川書店、二〇〇三年）に拠る。

一、巻末には影印を付す。

《射巻―三六》新時鳥香

【翻刻】

△（朱）新時鳥香

一　十炷香の札を用ゆ。

一　一の香、二の香、三の香、有明の香（客香なり）、月の香（ウ香なり）、各二包充、都合十包の内、七包出香とす。

一　一二の香、二種斗、外に拵へ試に出す。其餘の香は、各試なし。

一　一二三の香、六包打交て、其内一包除け、残五包、初の」射八四オ 出香とす。有明の香、月の香、四包打交て、内二包除け、残二包を後の出香として、二炷聞に出す。七包皆焚終て、一同に包紙を開くべし。

一　札打様

一の香に（花一月一）の札　二の香に（花二月二）の札

三の香に（花三月三）の札　有明香に　ウの札

月の香に　ウ二枚打　」射八四ウ

後の出香は二包聞終て札一枚打なり。二炷同香と聞は有明の札、二炷別香と聞は月の札をうつべし。

一　記録点、初五炷は独聞の差別なく一点充、後の二包は独聞五点、二人四点、三人より三点宛なり。後の二包を聞中たるは、褒美として聞の下に時鳥と認るべし。」射八五オ

一　二炷別香出れば、哥を口に認る。二炷同香出れは、哥を奥に認るべし。其歌如此。

ほとゝきす鳴つるかたを詠れば唯有明の月そ残れる

一　記録認様、大概左に顕す。」射八五ウ

新時鳥香記　三（朱）　有明（朱）　月（朱）　除（朱）

〔表〕」射八六オ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

一　二　コ　2

三　2

6－1＝5…初

有明　月　2－2＝×1

後…2

本香*には、地香*「一」「二」「三」の香と、客香*「有明」の香、ウ香*「月」の香、各二包計十包から、七包を用いる。試香*は、「一」「二」の香のみ行う。まず、地香六包から一包を除き、残り五包を焚く（初段）。次に、客・ウ香全四包から二包を除き、残り二包を二炷*聞きにして焚く（後段）。全七包を焚き終わって

から、すべての香包紙を開いて正答を披露する。

答えには、十炷香札を用いる。初段の「一」「二」「三」の香には、それぞれ「花」「月」の札の「一」「二」「三」を一枚ずつ打つ。また、後段では、二炷聞き終わった後、同香ならば「ウ」の札一枚（有明の札）、別香ならば「ウ」の札二枚（月の札）を打つ。

記録点は、初段では、聞き当てた人数に関わらず一点であるが、後段の二炷は、独り聞き五点、二人では四点、三人以上では三点である。後段を聞き当てた場合は、褒美として記録の最下段に「時鳥」と書く。また、後段の二炷において、別香が出た場合は香之記の冒頭に、同香ならば末尾の方に、伝書が指定する「ほとゝぎす」歌一首を記す。

なお、本組香に先立つ「時鳥香」が、志野流三十組の中に見出される。出香の数や手順は、本組香も同じであるが、「時鳥香」は、初段の五炷のうち、二炷目と三炷目を続けて聞き当てたときは、記録に「ほとゝきす」と記すという点が、本組香と異なる。また、「ほとゝきす」は仮名文字で書くが、「有明の月」は仮名で書いてはならないという記載も、「時鳥香」には見られる。

（2）和歌作品との関わり

記録の奥に書く歌として指定されているのは、『百人一首』八一番に載る次の歌である。

後徳大寺左大臣

ほととぎす鳴きつるかたをながむればただありあけの月ぞのこれる

この歌は、「残月香」（楽巻―五）「和歌を主題とする組香（一）」（『社会科学』第46巻第3号所収）においても、組香の主題として用いられるところであった。

本組香では、初段の香は、単に「一」「二」「三」という香名だが、後段の「客」「ウ」香を、それぞれ「有明」「月」の香とし、「有明」と「月」とを両方聞き当ててはじめて、褒美のことばとして「時鳥」と記すというのも、いかにも前掲歌をもとにした趣向であるが、いずれも志野流三十組中の「時鳥香」の踏襲である。

《射巻―三七》蛙香

【翻刻】

△（朱）蛙香（カハヅ）

夫木集　　従二位家隆卿

川風は井手の浮草吹わけてよるへの浪に蛙なくなり

山劭の井手は蛙の名所にて、何國にても蛙多く群る内へ井手の蛙一匹入れは、多くの蛙鳴止と云傳ふ。是に因て組たる香也。

一　十炷香の札を用ゆ。」射八六ウ

一　池蛙の香、田蛙の香、沼蛙の香、各三包充、水の香三包（三色充、三包也）、井手の蛙の香一包（ウ香なり）、都合十三包聞香とし、二炷開三度、一炷開七度焚出すなり。二炷開は六炷焚終て包紙を開く。一炷開は一包毎に包紙を開くべし。

一　水の香、井手の蛙の香、二種は試なし。其外は外に拵へ試に出すべし。」射八七オ

一　水の香三包に地香一包充組合せ、二炷聞三結とし、残七包は一炷聞とす。井手の蛙の香出るを限として香は終るなり。

一　二炷開六包、皆聞終て名乗紙に認出すを、記録に写し、香包紙をひらき、点を定て後に一炷開七包焚出す。此時に、十炷香の札を用ゆ。」射八七ウ

池蛙に　一の札　　田蛙に　二の札

沼蛙に　三の札　　井手蛙に　ウの札

如此札を打べし。名乗紙認様左の通也。

名乗
田水
水沼
池水

」射八八オ

一　記録点は、地香一点充、水の香二点充、井手の蛙香四点、井手の蛙香聞違、星二つ充、各独聞の差別なし。記録したゝめ様左の如し。」射八八ウ

蛙香記

〔表〕」射八九オ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

池蛙
田蛙
沼蛙　　3コ

水　　3（1色ずつ）＝1×3　＝1×3　　2×3

井手の蛙　1　　＋6　　7

本香*には、地香*「池蛙」「田蛙」「沼蛙」の香、各三包と、客香*「水」の香を別香で三包、ウ香*「井手の蛙」の香一包の、計十三包を用いる。まず、二炷開*きを三度行い、六炷すべてを焚

き終わってから包紙を開き、正答を披露する（前段）。次に、一*炷開きを七度行う。一炷焚くたびに包紙を開き、正答を披露する（後段）。試*香は地香のみ。

前段の六包の香は、「水」の香三包に地香を一包ずつ組み合わせ、二包ずつ三組を作る。後段は、残りの香を一炷ずつ焚き、「井手の蛙」の香が出たところで香席は終わりとなる。

答え方は、前段では、すべて聞き終わってから名*乗紙に答えを記して提出する。この時、出*香の順に「池」「田」「沼」「水」の略称を用い、二炷ずつ記す。その答えを記録に写し、香包紙を開いて点を付けてから、後段に移る。後段では、十*炷香札を用い、「池蛙」「田蛙」「沼蛙」の香にはそれぞれ「一」「二」「三」の札、「井手の蛙」の香には「ウ」の札を打*つ。

記録点は、聞き当てた人数に関わらず、地香を聞き当てると一点、「水」の香は二点、「井手の蛙」の香は四点である。また、「井手の蛙」を聞き違えると星*を二つ付ける。

（2）和歌作品との関わり

冒頭に掲げられている歌は、『夫木和歌抄』巻第五春部五、一九二三番に載る。

正治二年百首　　従二位家隆卿

川風は井出のうき草吹きわけてよるべの浪にかはづ啼くなり

なお、どこの蛙でも、群がって鳴いているところに井手の蛙を入れると、他の蛙が鳴き止むという話は、佐野紹益『にぎはひ草』〔天和二年（一六八二）刊〕上に見える。

埋忠明真は、井手に出向いた際、夜更けに井手の蛙が「いみじく心すみ物あはれなる聲」で鳴くという古老の話を思い出し、蛙が多く鳴く所で一夜を過ごした。その聲に感動した明真は、井手の蛙を多く捕まえて京に持ち帰り、舟橋の川上に放すと、井手の蛙は変わらぬ声で鳴き、その川に元からいた蛙は鳴き止んだという。この話は当時、かなり話題になっていたようである。以下、当該箇所の本文を引用しておこう。

いかなるふしにや有けん、井手のあたりに行けるに、此事おもひ出て、彼かはつのおほく鳴所を尋て、一夜宿して此声を聞けり、昔古老のもの、かたりしにたがはす、よのつねのかへる声にはかはりて、まことに心もすみて覚けれは、うちもねす、明ぬれは、そのかはつを数多とりて、いたまさるやうにこしらへて、京にもて来りてけり

此埋忠氏か住所は、舟はしの川上にて、枕のもとになかれ

有けれは、よのつねのかへる、よな〳〵あまた鳴ける、その川にみなはなし入たりけり、しはしは音もせさりけるか、井手にて聞し声そと覚たる鳴出て、其声数々に成にけれは、よのつねのかへる、声やみて一声もなかす、いつ方へそ行けるにや、もとの川には有なから、こゑを出さす成にけるにや

かゝるふしきなる事こそ有けれと、其比みやこの外までも沙汰しあへる事なりしと、度〳〵此事聞て侍し（『仮名草子集成』第五十五巻、東京堂出版、二〇一六年二月）

もっとも、『にぎはひ草』では、井手の蛙を多く放ったとあり、本伝書に「一匹」というのとは異なるが、同じ出所の話であろう。

なお、本伝書所載「新蛙香」（書巻一一〇）も、「いつくにても蛙の啼所へ井手の蛙を入れは外の蛙音をやむといふ説」に拠る組香である。

《射巻一三八》妻乞香

【翻刻】

△（朱）妻乞香　　中納言家持

春の野にあさるきゞすの妻乞におのか有かを人にしれつゝ

此哥によつて組たる式也。

一　十炷香の札を用ゆ。

一　一二三の香、各三包充、ウ香一包、聞香とす地香外に捨へ試に。出す。ウ香試なし。本香一二二と一三三と三包を」射八九ウ　一結充にして二結設け、結なから交て、其内一結を取て、三炷聞に焚出す。連座聞終りて名乗紙に左のことく認出す。

一二二と出れは　　春の野と書

一三三と出れは　　きゞすと書

但し上中下の違は構なし。

名乗紙を記録に写して後に、残一結に残香」射九〇オ　四包二二三ウを加へ、都合七包とし、打交て一炷聞に焚出す。此時に十炷香の札をうつ也。本香十包皆焚終て、一同に包紙を開て点を定るべし。

一　記録点、始三炷聞は、独聞三点、二人より二点充但し、二柱迄聞中、たるは点なし後七炷は地香独聞二点、二人より一点宛、ウ香独聞四点、二人より三点充也。ウ札を」射九〇ウ　妻乞と認るべし。

一　證哥を記録の口に認め、下の句、七文字に本香銘を朱にて認る。ウの香は其當る所を明置き、妻乞の所にウと認る也。猶、認様左に記す。考知べし。」射九一オ

妻乞香之記

春の野にあさるきゞすの妻乞(ウ朱)に

お(一朱)の(三朱)か(三朱)あ(三朱)り(三朱)か(一朱)を(二朱)人にしれつゝ、

〔表〕」射九一ウ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

一
二
三
ウ　1

コ　二　三
3＝二＋三＋×3
一　一　1

前一結

一＊＊（残組）
ウ　1×3

7＝
1×7…後

本香には、地香「一」「二」「三」の香、各三包と、ウ香一包の、計十包を用いる。試香は地香のみ行う。

まず、「一」の香二包と「二」の香二包、「一」の香一包と「三」の香二包の、三包二組を作り、組のまま交ぜて、どちらか一方を取り、三炷聞きにする（前段）。すべての人が聞き終わってから、名乗紙に答えを記す。すなわち、「一」「二」「二」の組が出た場合は「春の野」、「一」「三」「三」が出れば「きゞす」と書く。このとき、出香の順は不問である。

名乗紙の答えを記録に写してから、前段で出なかった三包一組に、残りの「一」「二」「三」「ウ」の香、各一包の計四包を加え、全部で七包として交ぜ、一炷聞きを七度行う（後段）。答えには十炷香札を打つ。

前段・後段のあわせて十炷を焚き終わった後、すべての包紙を開いて正答を披露する。

記録点は、初段の三炷聞きのときは、独り聞きが三点、二人からは二点である。なお、本伝書の割注には、「二炷迄」（一炷あるいは二炷）聞き当てても得点にならないとある。一炷というのは、「一」「二」「二」と「一」「三」「三」のいずれの香の組にも出る「一」の香を聞き当て、残りの二炷について、「二」と「三」の香を聞き違えた場合について言うのであろう。だが、「一」「二」「二」と「一」「三」「三」の香の組のいずれかが出ることになっているのであるから、二炷聞き当て、一炷聞き違えるということは、答えの可能性としてはありえない。あるいは、伝書割注の「二炷迄」は「一炷」の誤りか。

また、後段は、地香の独り聞きは二点、二人からは一点、「ウ」香の独り聞きは四点、二人からは三点である。「ウ」香を聞き当てたときは、記録には「妻乞」と記す。なお、記録の冒頭に證歌を書き、第四句の「おのかありかを」には、後段で出た順に「一」と、「二」あるいは「三」の香名を朱で右に傍書するが、「ウ」の香については、当該箇所に傍書せず、空白のままとし、

第三句「妻乞」に「ウ」と朱で右傍書する。

（2）和歌作品との関わり

冒頭に掲げられている歌は、『拾遺集』巻第一春、二一番に載る。

題しらず　　大伴家持

春ののにあさるきぎすのつまごひにおのがありかを人にしれつつ

この歌は、本連載の「和歌を主題とする組香（二）」（『社会科学』第46巻第4号）所収「きゞす香」（楽巻―二六）に、集付「古今六帖」、作者「中納言家持」、第二句「朝啼きゝすの」という本文で載るところである。そこでも触れたことだが、この歌は『古今六帖』第二、一一八七番にも、第二句「あさなくきじの」、結句「人にしられて」という本文で載っている。本組香では出典を記さないが、和歌本文は『拾遺集』と完全に一致する。

同歌を主題とする「きゞす香」では、「春日野」「交野原」「宮城野」「武蔵野」「嵯峨野」の香の、いずれかに入れ換えられた「きゞす」の香を聞き当てるというものであり、「きゞす」を追うという趣向である。一方、本組香では、「春の野」「きゞす」を聞きの名目としながらも、唯一炷の「ウ」香を聞き当てたときのみ、記録に「妻乞」と記し、また、後段七炷の香の出方を第四句「おのかありかを」に傍書する際にも、「ウ」の香だけは当該箇所を空白にした上で、第三句「妻乞」に傍書するというように、「妻乞」に焦点を合わせて組まれている。

《御巻―五》重陽香

【翻刻】

△（朱）重陽香　　元輔

拾遺集
我宿の菊の白露けふことに幾世積りて渕と成らん

此哥に因みて組侍る也。

一　十炷香の札を用。

一　一の香一包、二の香二包、客香六包香二種を三包充に包む」御一二オ九包出香とし、皆終て包紙を開くべし。

一　地香、外に拵へ試に出す。客香、試なし。

一　初の客に三の札、後の客に二の札打べし。

一　記録点は、客香独聞四点、二人より一点充、地香独聞二点、二人より一点充也。聞の褒美として左のごとく認る。

一の香斗聞は　　我宿（朱）

二の香斗聞は　　白露（朱）」御一二ウ

一二の香斗り聞は　燕（朱）
初後二色の客を聞は　菊（朱）
客一色斗り聞は　雨（朱）
客六炷聞は　幾世（朱）
皆中は　重陽（朱）
如此聞の下に書べし。猶認様末に記。」御一三オ

重陽香之記

〔表〕」御一三ウ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

一　1コ
二　2コ
三　3
客　3
9

本香には、地香「一」の香一包、「二」の香二包、「客」の香六包（二種類の香、各三包）の、計九包を用いる。試香は地香のみ行う。すべて焚き終わってから包紙を開き、正答を披露する。

答えには十炷香札を用いる。本伝書には、「客」の香、二種類のうち、初めに出た香には「三」の札を、また、後に出た香には「二」の札を打つとあるが、「一」の香には「一」の札、「二」の香には「二」の札、「客」の初めの香には「三」の札、「客」の後の香には「ウ」の札を用いるのが順当であろう。

記録点は、客香の独り聞きは四点、二人からは一点である。また、地香の独り聞きは二点、二人からは一点とする。記録には、聞き当てた香の種類と数によって、褒美のことばを記録の最下段に記す。すなわち、聞き当てた香が「一」の香だけの場合は「我宿」、「二」の香だけの場合は「白露」、また、「一」と「二」の香だけを聞き当て、「客」の香を聞き違えた場合は「燕」と書く。また、「客」の香を二種類ともに聞き当てたときは「菊」、どちらか一種類のみのときは「雨」、「客」の香の六炷すべてを聞き当てたときは「幾世」と記す。さらに、九炷すべてを聞き当てた場合は「重陽」と書く。

（2）和歌作品との関わり

冒頭に掲げられている歌は、『拾遺集』巻第三秋、一八四番に載る。

三条のきさいの宮の裳ぎ侍りける屏風に、九月九日の所　もとすけ
わがやどの菊の白露けふごとにいく世つもりて淵となるら

ん

これにより、応和元年（九六一）十二月十七日に行われた、三条后宮（冷泉天皇中宮、昌子内親王）の裳着（『日本紀略』）のために作られた、清原元輔の屏風歌であることがわかる。

褒美のことばのうち、「重陽」は、もちろん九月九日の重陽の節句に拠ったものであり、また、「我宿」「菊」「白露」「幾世」は、『拾遺集』元輔歌に見られるが、「燕」「雨」の語は、右の歌にはない。これらは、『和漢朗詠集』巻上秋「九日付菊」題の、冒頭に配される次の李端の漢詩（二六一番）に拠ると考えられる。

燕知社日辞巣去　えむはしやじつをしてすをじしてさんぬ
菊為重陽冒雨開　きくはちようやうのためにあめををかしてひらけたり

「燕は秋の社日（秋分前後の戊の日）を知って南へ渡って行き、菊は重陽（九月九日）に間に合おうとして雨も厭わず咲く」という時季の捉え方は、本伝書成立時点においても、常識であったものだろう。

なお、前掲『拾遺集』の元輔歌は、この『和漢朗詠集』巻上秋「九日付菊」題にも、「中務」の歌として見出される（二六五番。ただし、第四句「いくよたまりて」）が、本伝書は、冒頭歌に示された集付のとおり、直接的にはやはり『拾遺集』に拠ったと考えられる。

《御巻―六》枝折香

【翻刻】

△（朱）枝折香

新古今集
吉野山こぞの枝折の道かへてまだ見ぬかたの花を尋ん　西行法師

此哥の心をとりて組香とし侍る。

一　十炷香の札を用。

一　一の香三包（是を枝折と名付る）、二の香二包、三の香二包、都合七包」（御一四オ）打交て出香とす。

一　枝折の香一包、外に拵へ試に出す。其外は試なし。

一　二の香、三の香、客香、各一包充（隠銘なり）、外に拵へ香元に置くべし。

一　枝折香の試終て後に、出香七包を一包充取て焚出し皆焚終りて後に二三客の香三包を能く交て焚出すべし。

一　十炷皆終て札を筆記し、香包を披き点をかける也。」（御一四ウ）

一　記録認様は、枝折の香三包を始に出たるを「し」と認め、中

に出たるは「ほ」と認め、後に出たるを「り」と認べし。二三の香、常のことし。末の三炷の香は出様により桜の名を左の如く記。

二　二　三
三　ウ　楊貴妃　二　ウ　しほ竈　三　二　虎の尾
ウ　三　ウ　三　ウ
二　普賢象　二　三　すみ染　三　二　熊がへ」御一五オ

如此三字に成るやうに認べし。

一点は、枝折の香は試十炷香の通り、二三の香は、無試十炷香の如く点をかくるべし。末に出たる三炷は、始の二三と引合せて点をかくる也。客香・地香ともに一点充也。末の三炷は、皆中は長二点、其外は聞あてたる所の字斗へ短く点をかくるべし。認様左に記す。」御一五ウ

枝折香之記

〔表〕」御一六オ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

一枝折　コ　3
二　三　2
7…前
ウ　1　1　1
3…後

本香には、まず、客香「一」の香（「枝折」香）三包と、地香「二」「三」の香、各二包の、計七包を用いる。試香は「枝折」の香のみ行う。そして、これらとは別に、「二」「三」の香と「客」香、各一包を、香名がわからないようにして（隠名）、並べた本香の下（香元）に置く。

「枝折」香の試香を終えてから、本香七包を一炷ずつ焚く（前段）。次に、香元に置いておいた「二」「三」「客」の香、各一包計三包を、よく交ぜてから一炷ずつ焚き出す（後段）。

答えには十炷香札を用いる。まず前段では、「枝折」香には、試十炷香の通りに「一」の札を打つ。また、「二」「三」の香は、試香がなく区別がつかないため、無試十炷香の要領で、先に出た香に「二」の札、次に出た香に「三」の札を打つ。後段では、前段で「二」「三」の札を打った香に合わせて、同香に同じ札を打ち、また、「客」の香に「ウ」の札を打つ。

十炷すべてを焚き終わり、答えの札を記録に筆記してから、包

紙を開き、正答を披露する。記録には、前段では、「枝折」香三包を、出香[*]の順に「し」「ほ」「り」と記す。「二」「三」の香は、通常通り「二」「三」と書く。そして後段の三炷は、出香の順に、「楊貴妃」（二・三・ウ）、「しほ竈」（二・ウ・三）、「虎の尾」（三・二・ウ）、「普賢象」（三・ウ・二）、「すみ染」（ウ・二・三）、「熊がへ」（ウ・三・二）の三文字を書く。

点は、客香・地香の区別なく、一点である。なお、後段では、すべて聞き当てると長二点（長い合点ふたつ）を付し、それ以外は、一炷目を聞き当てれば聞[*]きの名目の一文字目、二炷目ならば二文字目、三炷目ならば三文字目に、短く合点を付ける。

（2）和歌作品との関わり

冒頭に掲げられている歌は、『新古今集』巻第一春歌上、八六番に載る。

花歌とてよみ侍りける　　西行法師

よしの山こぞのしをりのみちかへてまだ見ぬかたの花をたづねん

本組香は、この歌に拠り、まだ見たことのない桜を愛でようという趣向である。また、「よしの山こぞのしをり」（去年、吉野山を分け入って花を見たときの道しるべ）という歌句から、本香の前に「枝折」香の試香を行うという発想を得たのであろう。

聞きの名目、「楊貴妃」「しほ竈」「虎の尾」「普賢象」「すみ染」「熊がへ（熊谷）」は、いずれもサクラの園芸品種である。このうち、「すみ染」を除く五つについては、その見た目の特徴や命名の由来等が、俳諧歳時記『滑稽雑談』（其諺著。正徳三年（一七一三）序）に載っている。この書は、後世への影響が大きいとされるが、本組香も、その文化圏において生まれたものと見做されよう。

《御巻―七》八幡山香

【翻刻】

△（朱）八幡山香　石清水香とも云

建長百首　　衣笠内大臣

石清水すみはしめけん月影のみつの衣に影もうつりし

此哥の縁によりて組侍る

一　十炷香札を用。

一　放生會方五人、女郎花方五人と分つ放生會方。上座也「御一六ウ」

一　鳩の香、魚の香、女郎花の香客香なり、各三包充、都合九包打交て、其内より一包とり除け、残八包本香とし、二炷宛四次に焚出す也。一炷充に折居を添て廻し、札を受るべし。八

包皆焚終りて後に、香包帋をひらき、点星を定むる也。

一　鳩香、魚香、外に拵へ、放生會方斗りに試に出す。」御一七オ

女郎花方は試なし。

一　札打様は、鳩の香に[一札]の、魚の香に[二札]の、女郎花の香に[三札]の打べし。

一　放生會方は、試の聞に合せて札をうつ。又、女郎花方にては無試十炷香の通りに札を打べし。これを女郎花のくねると名付る也。無試十炷香のことく、一二三の順を立るに及ず。」御一七ウ　心次第に自分〳〵に順を立て札をうつてよし。

同香二炷結ひたるを中りとす。

一　記録には、二炷宛組合せて認る。其名目左の如し。

二炷とも鳩ときく時は　鳩峯

二炷とも魚ときく時は　放生川

二炷とも女郎花ときく時は　おほかるのべ」御一八オ

初に鳩、後に魚は　石清水

初に鳩、後に女郎花は　男山

初に魚、後に鳩は　さやけき影

初に魚、後に女郎花は　名の月

初に女郎花、後に鳩は　一時

初に女郎花、後に魚は　色めく野邊

客香独聞三点、二人より二点充、地香は何人」御一八ウ　にても一点充也。放生會方にて客香の聞違、星一つ充附る。女郎花方にては試を聞ざる故に過怠の星なし。

一　勝負は、双方各点星を消合て、点多き方、勝と定るべし。記録認様、左のごとし。」御一九オ

記録艸稿

〔表〕」御一九ウ

八幡山香記　女郎花除（朱）

〔表〕」御二〇オ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

一　鳩
二　魚　3コ
三　女郎花

9－1＝2×4

「石清水香」とも呼ばれる組香である。「放生会方」と「女郎花方」、各五人に分かれる。「放生会方」が上座である。

本香には、地香[*]「鳩」「魚」の香と、客香[*]「女郎花」の香、各三包の計九包を用意し、その中から一包を除き、残り八包を二炷[*]ずつ、四度焚き出す。本香に先立ち、「鳩」「魚」の香は、「放生会方」にのみ試香[*]を行う。「女郎花方」には試香はない。

答えには十炷香[*]札を用いる。「放生会方」は、試香のとおりに、

「鳩」の香に「一」の札、「魚」の香に「二」の札、「女郎花」の札に「三」の札を打つ。また、「女郎花方」は、無試十炷香のとおりに札を打つ。ただし、無試十炷香は、通常、一炷目には「一」の札を打ち、同香ならば「一」の札、異香ならばその度に「二」「三」の札というように、「一」「二」「三」の札を順に打っていくが、本組香では、順を追わず、気が向くままに札を打ってよい（これを「女郎花のくねる」と名付ける）。一炷ごとに折居を廻し、札を打つ。八包すべてを焚き終わってから、香包紙を開いて正答を披露し、点を付ける。

記録には、二炷ずつ組み合わせた聞きの名目を記す。すなわち、「鳩峯」「放生川」「おほかるのべ」「石清水」「男山」「さやけき影」「名の月」「一時」「色めく野邊」である。

同香を二炷聞き当てると得点となる。客香の独り聞きは三点、二人からは二点。地香は、聞き当てた人数に関わらず、一点である。「放生会方」で客香を聞き違えた場合は、星を一つ付ける。「女郎花方」は、試香がないため、聞き違えたときの罰として星を付けることはしない。勝負は、「放生会方」「女郎花方」、それぞれに点と星を差し引きして、点の多い方を勝とする。

（2）和歌作品との関わり

冒頭に掲げられている歌は、『夫木抄』巻第三十四雑部十六、一五九八七番に載る。

建長八年百首歌合　　衣笠内大臣

いはし水すみはじめけん月影のみつのころもにかげぞうつりし

この歌は、南都七大寺のひとつ、大安寺の僧、行教が、清和天皇のために、貞観元年（八五九）、豊前国の宇佐八幡宮に参籠した際、宇佐の神が三衣（出家の袈裟）の袖に移ったという故事に拠る。その後、行教は、山城国の男山に八幡神を勧請し、石清水八幡宮を造営した。

この衣笠内大臣〔藤原家良（一一九二～一二六四）〕歌は、後に謡曲「女郎花」に引用されるところとなったが、本組香には、その詞章から多くの語句が取り入れられている（以下、本組香で用いられた語句を「　」で示す）。

謡曲「女郎花」は、「男山」に咲く女郎花が秋風に靡く情景をもとに、男性が通って来なくなったことを憂えて入水した女性と、その後を追って身を投げた男性という恋の迷妄を描いた作品である。男山（別名「鳩峯」「八幡山」）の山頂には、前掲の家良歌にも詠まれた「石清水」八幡宮があり、麓には「放生川」が流れる。男女が入水したというのも、この川である。

場面は「名の月」（名月）、八月十五夜であり、男山ならではの「さやけき影」が美しい。それは、日頃、殺生をしている生き物の供養のために、石清水八幡宮において、捕らえた「鳩」や「魚」などの生き物を放してやる「放生会」を行う日であった。

また、本謡曲に描かれる女郎花のさまは、まず、『古今集』仮名序に記される表現に拠るところが目に付く（傍線執筆者。以下同じ）。

しかあるのみにあらず、さざれいしにたとへつくば山にかけてきみをねがひ、よろこび身にすぎたのしび心にあまり、ふじのけぶりによそへて人をこひ松虫のねにともをしのび、たかさごすみの江のまつもあひおひのやうにおぼえ、をとこ山のむかしをおもひいでてをみなへしのひとときをくねるにもうたをいひてぞなぐさめける

ここから、「女郎花のくねる」「一時」という語句が見出され、謡曲「女郎花」に引用され、さらに本組香に用いられたと見られる。

なお、残りの「おほかるのべ」「色めく野辺」は、謡曲「女郎花」にはそのままの表現で見出すことはできないが、和歌にその用例を見出す。

題しらず　　をののよし木

をみなへしおほかるのべにやどりせばあやなくあだの名をやたちなむ　　『古今集』秋上、二二九番

寛平御時、蔵人所のをのこどもさがのに花見むとてまかりたりける時、かへるとてみな歌よみけるついでによめる　　平さだふん

花にあかでなにかへるらむをみなへしおほかるのべにねなましものを　　『古今集』秋上、二三八番

女郎花をよめる　　藤原顕輔朝臣

白露やこころおくらんをみなへしいろめく野辺に人かよふとて　　『金葉集』（二度本）秋、二三二番

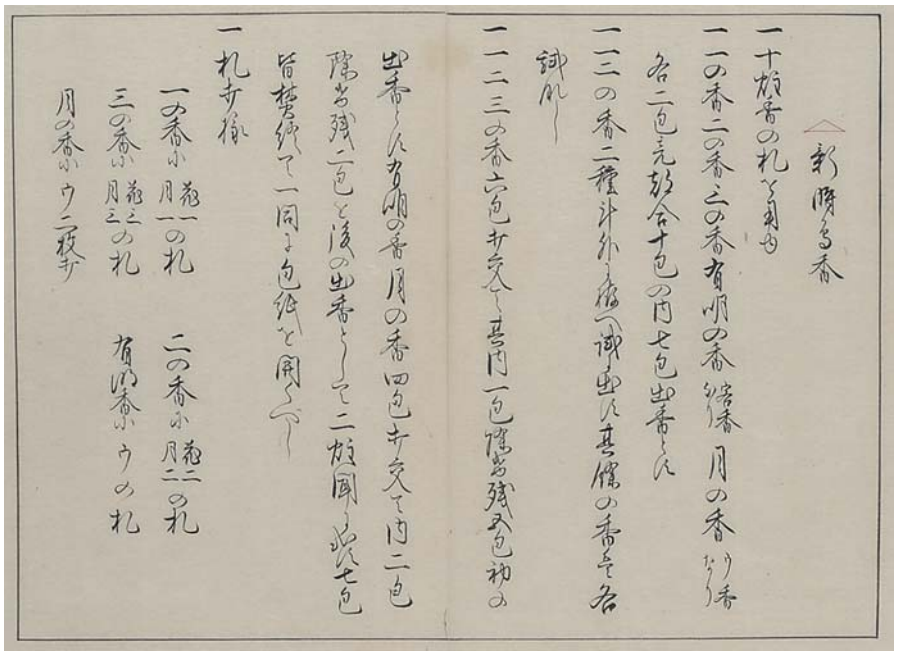
いずれも勅撰集に見られる、女郎花の咲く情景の描写である。

以上のように、本組香は、本伝書に記される藤原家良の歌を「縁」として、「八幡山」を舞台とする謡曲「女郎花」を視野に入れ、また、勅撰集における女郎花の歌の表現の伝統を踏まえて組まれたものと考えられる。

附記

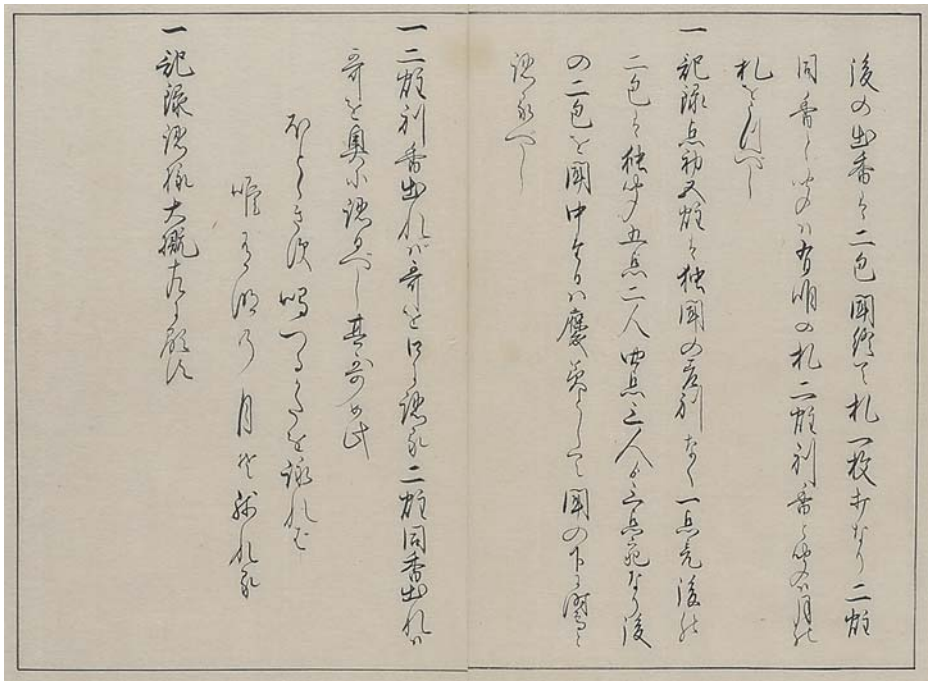
本稿は、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究（同志社大学人文科学研究所第19期研究会第4研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号16K00469、いずれも二〇一六～二〇一八年度）における研究の一部である。

【影印】　綴じ糸を外し、袋綴じを一丁ずつ開いて撮影したもの。



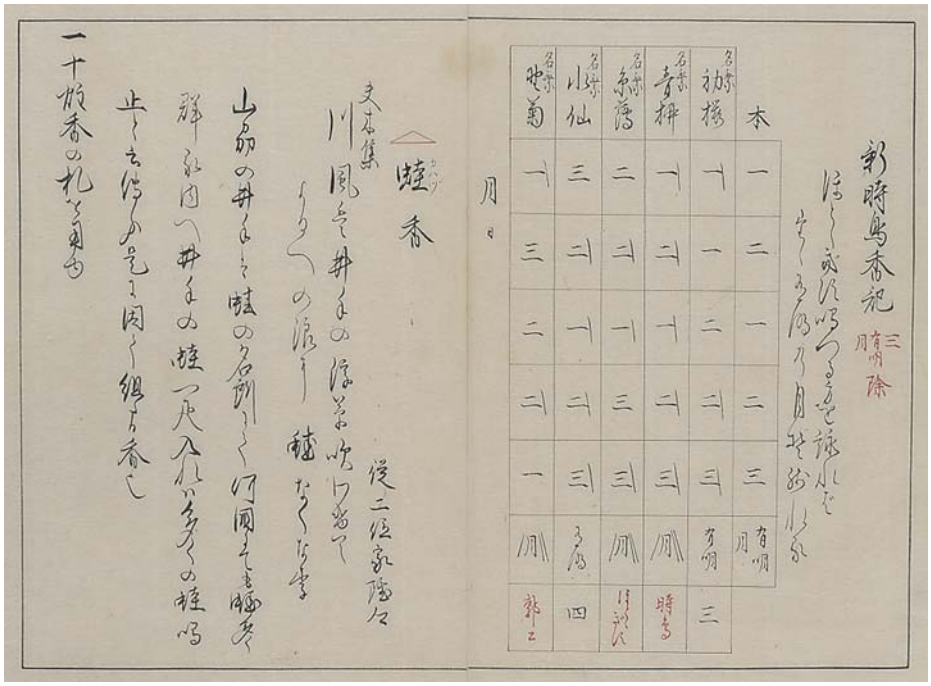
（射・八四丁表）

（射・八四丁裏）



（射・八五丁表）

（射・八五丁裏）



新時為香記　三月除

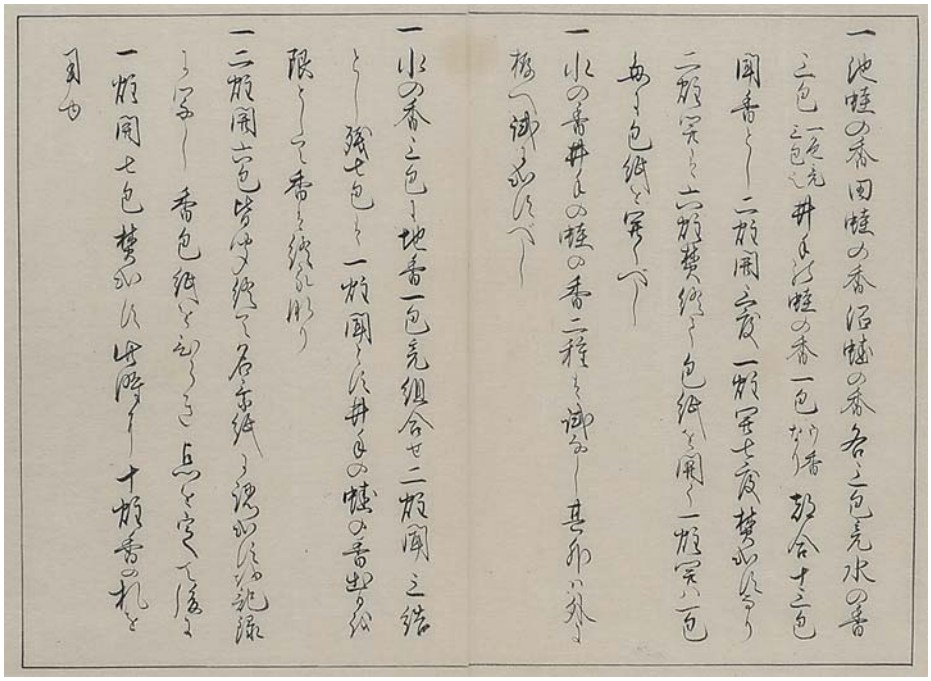
本

名木 初橋	一	二	一	二	三	有明月	
名木 青柳	一	一	二	二	三	有明	三
名木 糸桜	二	二	一	一	三	用	時雨
名木 小仙	三	二	一	二	三	用	けんぶん
名木 地菊	一	三	二	二	一	用	新二

月々

（射・八六丁表）

（射・八六丁裏）



一地蛭の香四蛭の香沼蛭の香各二包元水の香二包元元元二包元井戸沼蛭の香一包なり香　都合十二包

風香と二服風宝一服宝七度焚如此

二服宝と二服焚紙と包紙と風と一服宝八包

如此包紙と宝べし

一水の香井戸の蛭の香二種と御なり　其外の

橋御如此べし

一小の香二包と地香一包元組合せ二服風之結

と　残七包と一服風と成井戸の蛭の香出る成

限りて香と紙に残り

一二服風二包皆仕紙て名木紙と渡り成る紙録

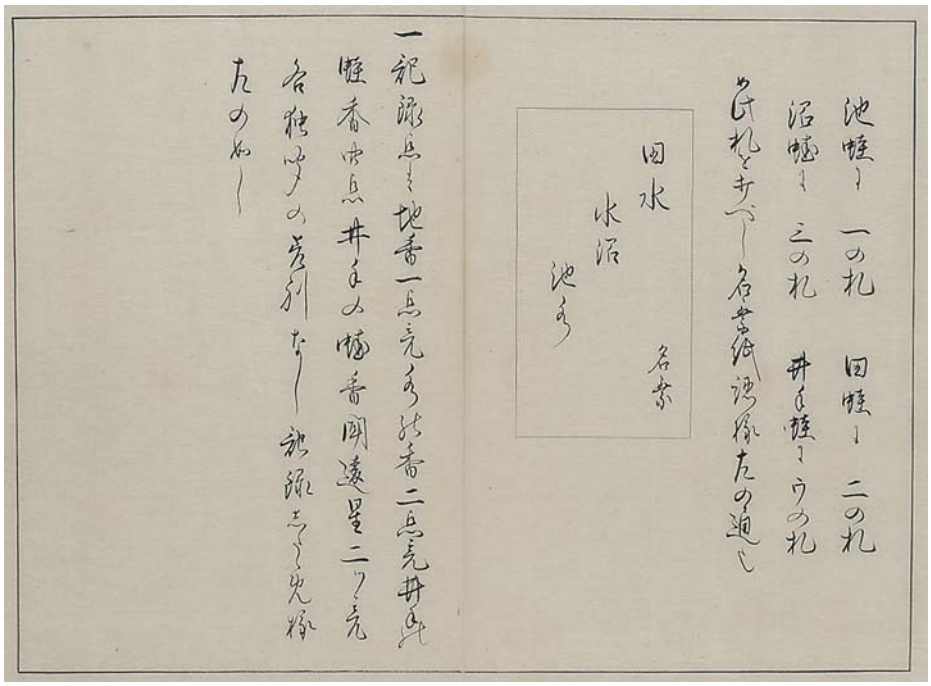
と宝　香包紙と包ミ　五つを宝て後と

一服風七包焚如此　山路と　十服香の札を

更也

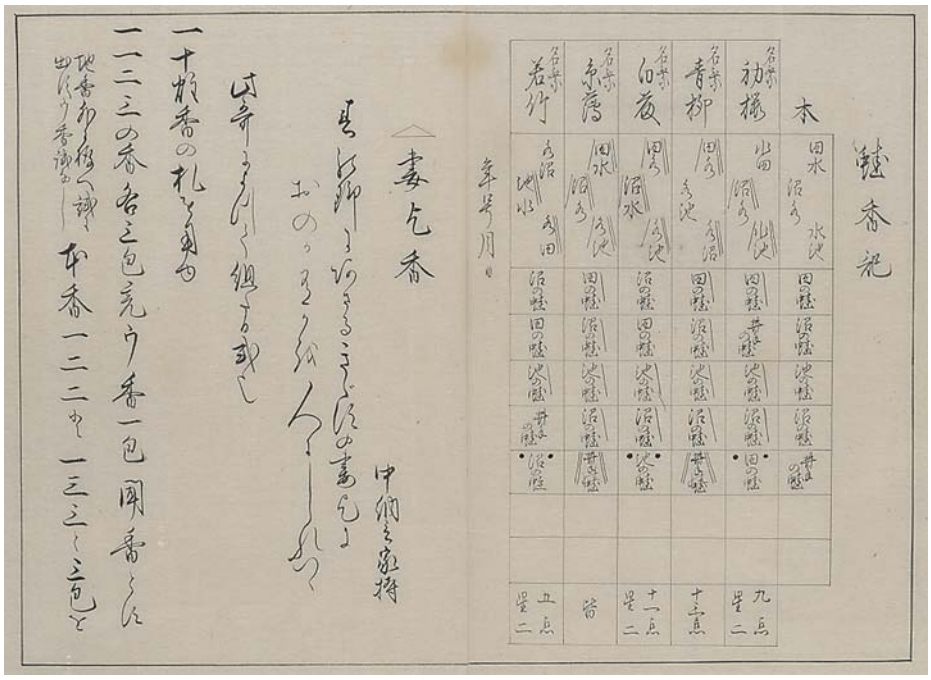
（射・八七丁表）

（射・八七丁裏）



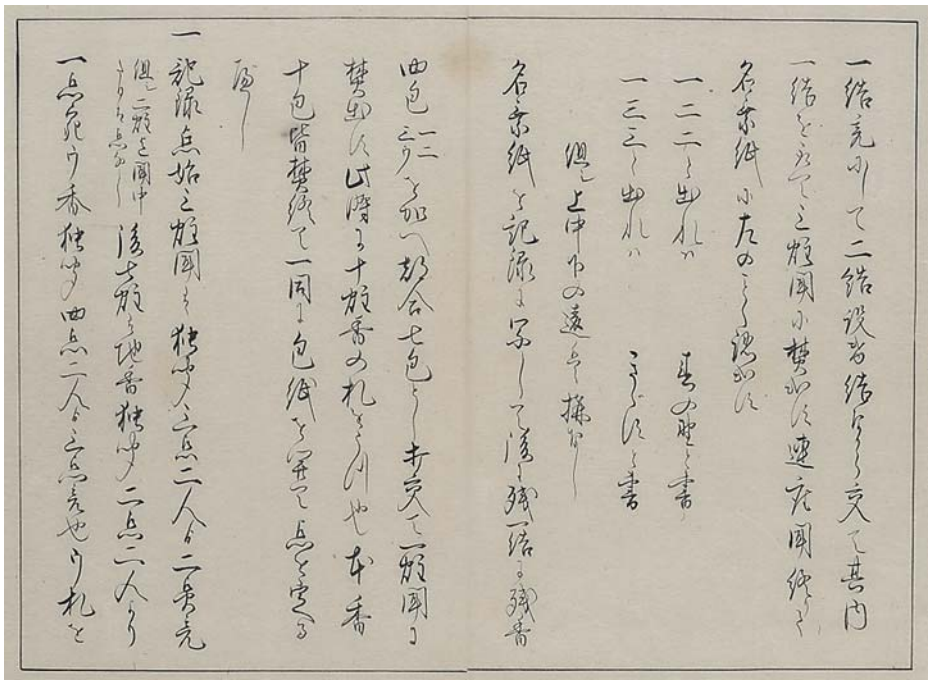
（射・八八丁表）

（射・八八丁裏）



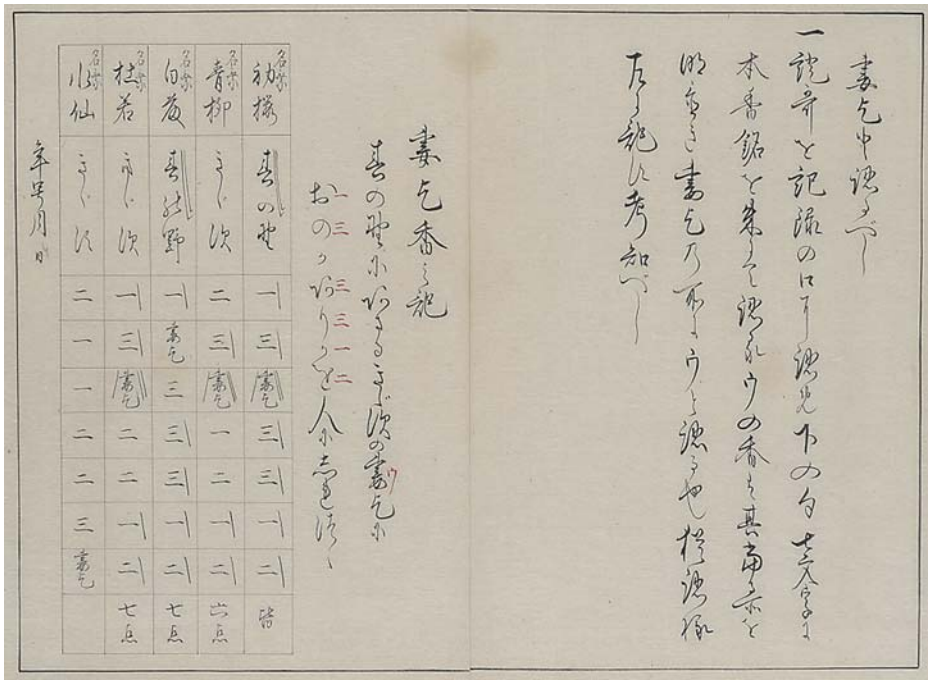
（射・八九丁表）

（射・八九丁裏）



（射・九〇丁表）

（射・九〇丁裏）



（射・九一丁表）

（射・九一丁裏）

（御・一二丁表）

重陽香

拾遺集　元輔

我宿乃菊の白露ちるとこそ
聞せ秋の深と知らん

式部の内侍の組香

一十枚番の札を用

一一の香一包二の香二包　客香十包　香二種を三包
元を包む

九包出香〳〵皆紙に包紙を用ゐべし

一地香部屋へ掛べし客香誠なり

一初の客小札の後の客小札の手へ〳〵

一就座五人客番性用四点二人ゆゑ一点元地
香性ゆゑ二点二人ゆゑ一点元也用の慶事にて
九のゆゑ也

一の香斗風ハ　我宿　二の香斗風ハ　白露

（御・一二丁裏）

一三の香斗風ハ　遊　初後二包の客と実ハ　菊

客一包斗風ハ　雨　客十枚風ハ　岌世

皆中ゆゑ　重陽

式部の下の書へ〳〵根源秘書ゆゑ

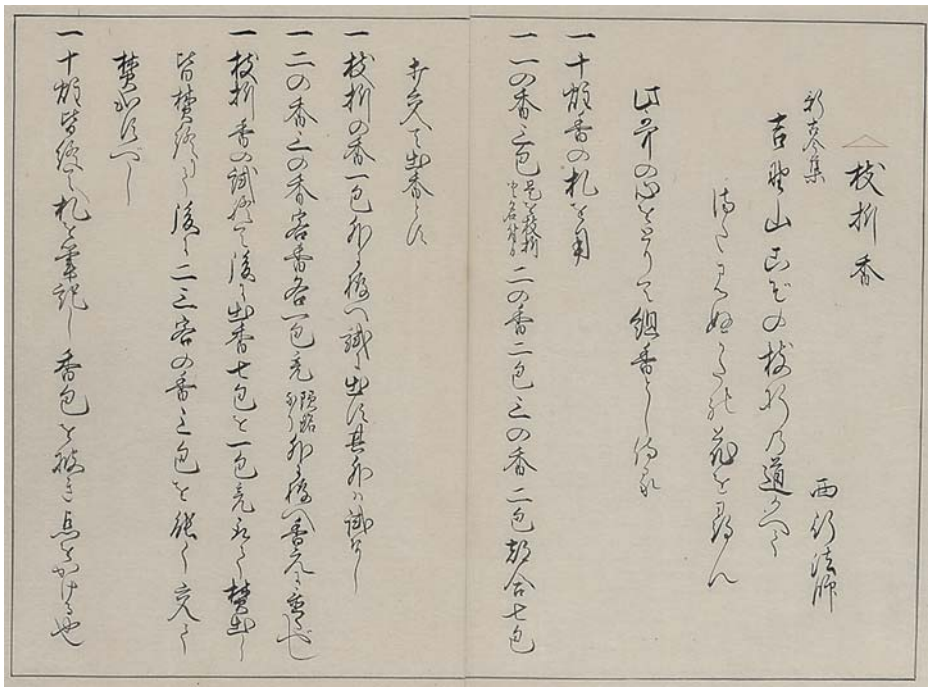
（御・一三丁表）

重陽香之記

木客	二客	客ウ	客ウ	一ウ	二ウ	ウ	客ウ	菊
名香 青柳	客ウ	客ウ	客ウ	二ウ	一ウ	二ウ	客ウ	菊
名香 常夜	客二	客二	客ウ	客一	ウ二	ウ二	客ウ	重陽
名香 枝若	客一	客ウ	ウ客	客二	ウ二	ウ二	客ウ	岌世
名香 牡菊	一客	二客	客二	ウ客	客ウ	客ウ	客ウ	雨
名香 糸落	二客	客ウ	ウ客	客ウ	客ウ	ウ客	客ウ	菊

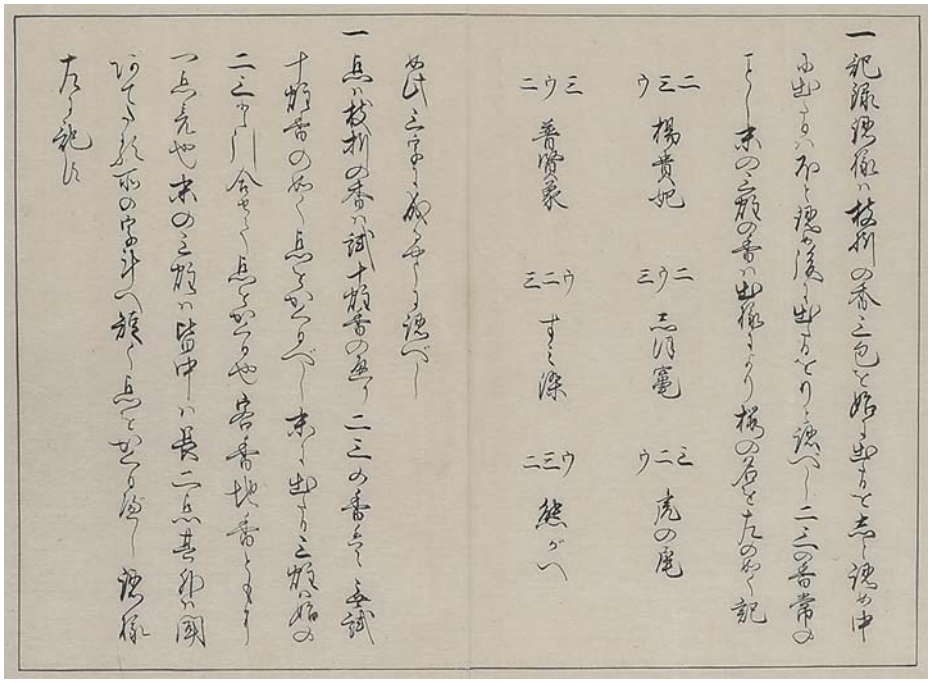
月の

（御・一三丁裏）



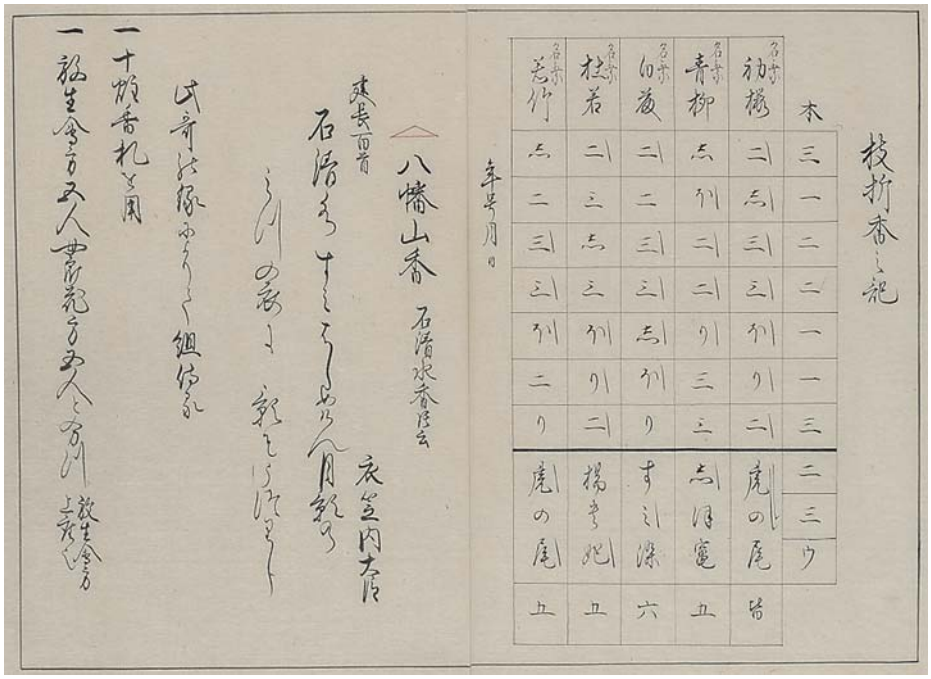
（御・一四丁表）

（御・一四丁裏）



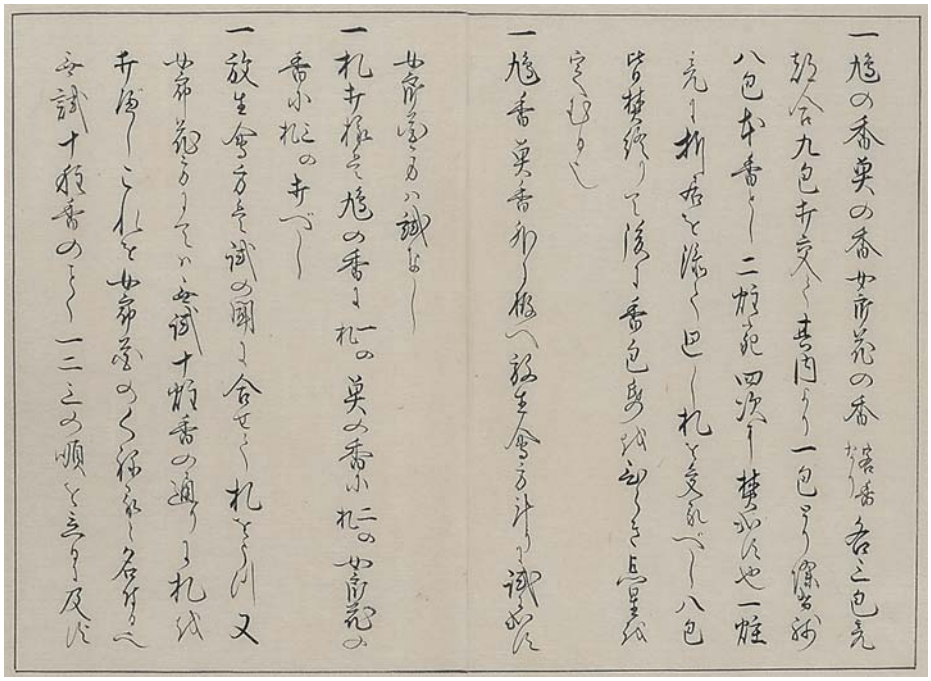
（御・一五丁表）

（御・一五丁裏）



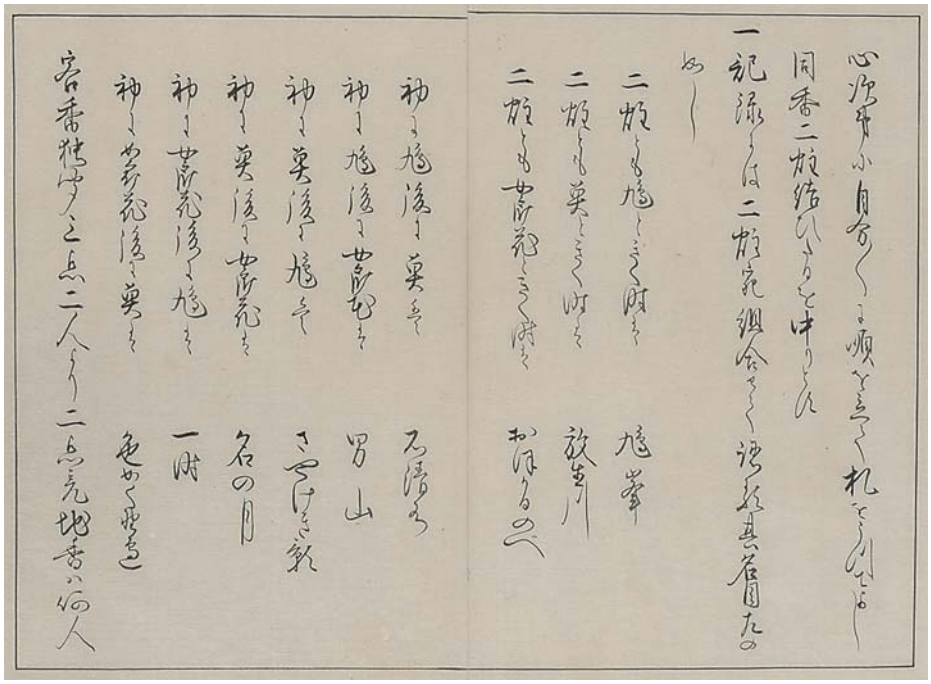
（御・一六丁表）

（御・一六丁裏）



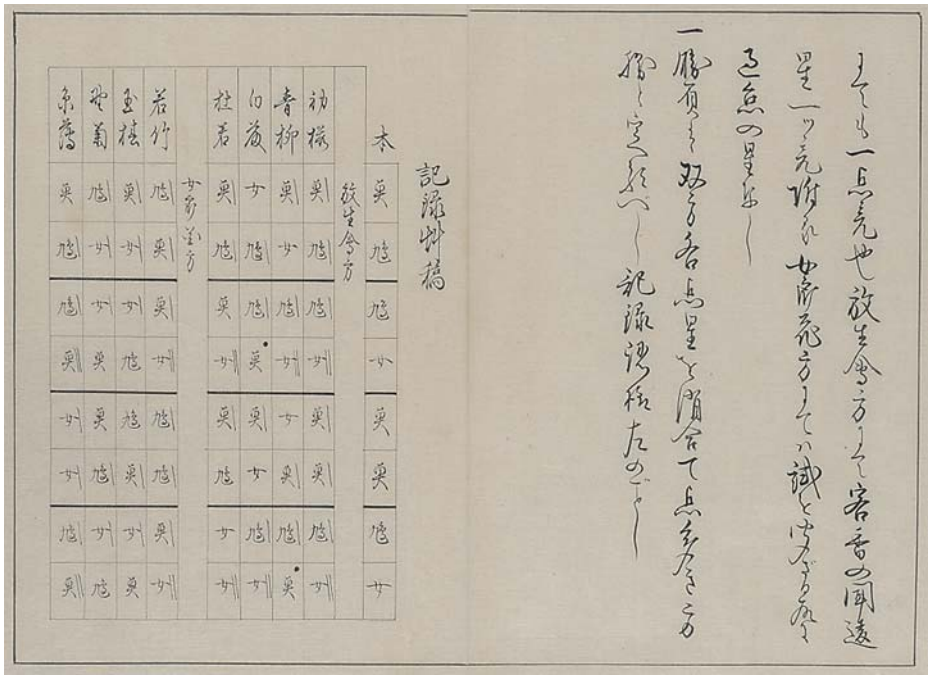
（御・一七丁表）

（御・一七丁裏）



（御・一八丁表）

（御・一八丁裏）



（御・一九丁表）

（御・一九丁裏）

八幡山香記

本　英　旭　女　英　英　旭　女

（御・二〇丁表）